〈地域構想フォーラム〉

アフリカのある村における死霊の観念と施術師，そして呪い歌
―続・私と「地域」とのおつきあい―[1)]

梅屋潔[2)]

神戸大学大学院国際文化学研究科

Ⅰ　はじめに

私はここ15年ほど，ウガンダとケニアの国境近く，ウガンダ側のトロロという地域の村でフィールドワーク（現地調査）をしています。専門的な言い方では「妖術・邪術をはじめとする世界観の研究」をしていますが，誤解を恐れずに日本風にわかりやすくいうと「呪いや祟り」をキーワードにそこに住む人びとの考え方を知ろう，としているわけです。

専門とする文化人類学では，現地に出かけ，そこに何年か住み込み調査を行うことが方法論の中心となっています。私の場合は現在までのべで36ヶ月ほどウガンダの村に住み込んでいます。しかも，ひとたび調査基地を定めてから移動することはあまりありません。定点観測です。とくに私が中心的な課題にしているのは，呪いとか祟りとか死霊とか，質問をしてすぐ答えが返ってくるようなものではなく，語るのがはばかられるような話題ですから，とくに時間がかかります。信用を獲得するためには同じ場所に何年もかけて住み，何回も訪れる必要があります。村に住んでいる人のほとんどはキリスト教徒で，クリスチャンネームをもっていますが（ウガンダ国民の60パーセント以上はキリスト教徒です），一夫多妻は堅持され，かなり自由に酒も飲まれています。

宗教の人類学（anthropology of religion）という分野が研究してきたのは，キリスト教やイスラム教のような教祖がいて，教義・教典があり，組織が体系だった宗教ではなく，生活のなかで自然に生まれ，はぐくまれてきた世界観です。草木中魚すべてのものに霊魂があるとするアニミズム的な思考を淵源とする広義の宗教です。日本ではかつて「民間信仰」（堀一郎）とか「固有信仰」（柳田國男）とよばれたものですが，近年「民俗宗教」（folk religion）とよばれるようになってきています[3)]。

なぜ，その「民俗宗教」のなかでも呪いや祟りをキーワードにしているか，という問いにはいろいろな答え方がありますが，そのうちのひとつは，こういった「超自然的」な観念が持ち出されるときには，その社会の中心的な価値観が表出すると考えるからです。例えば，アフリカでは，妻には子供を産むことが強く期待されています。豊穣の観念とも結びついています。子供が生まれないということは社会の中心的価値基準からいうと「異常事態」です。そこで呪いや死霊の祟りが疑われます。そして呪術医を呼んで「解呪」するわけです。「超自然的」な概念がどんな問題に対して持ち出されるのかを検討することで，遡及的にその社会が何を大切にしているのか読み取ろう，というのが私たちの目論見です。

私の調査しているウガンダ東部のアドラ民族（Jopadhola）[4)] の間でも，ほかのアフリカ諸社会と同じく，病や不幸の原因にはしばしば死霊や悪霊，呪詛，何らかの祟りが関与していると考えられています。それらは普通の人にも思い当たるものと，霊の専門家である施術師（ジャシエシ *jathieth*＝妖術医，呪術医，英語ではwitch-doctorが当てられることが多いが差別的な含みがある）や薬草師（ジャヤーシ*jayath*）に頼るしかないものとがあります[5)]。どの村にも何人かの専門家が

いて，普段は普通の農民ですが，依頼に応えて神霊の意向を尋ね，適切な対処方法を伝えたりします。

基本的には「天国」や「地獄」のイメージ，観念をもたず，あまりいいことがないけれども不幸や病がない世界が秩序だった世界として理想とされ，禍の原因を探り，解釈し，それに対処する技法が発達しています。死や病を含む不幸が客観的に多い，ということもあるのですが，かなりドライというか，アイロニカルな世界観です。現代日本の都市社会のような，毎日がハレのお祭りで，常にもっといいことを望んで未来への祈りに特化した世界とは対照的です。この村の考え方では，いいことがありすぎると，周囲の「妖術」witchcraftの対象になります。結果として，特別な幸運や成功に抑制がかかっている節もあります。金持ちは，その財力を使って強力な妖術返しをしているから，一時的には結構な暮らしができるかもしれませんが，結局はいい死に方はしない，というのが大方の見方です。当然，汗水たらして働きもせず，「キソマ」（*kisoma*＝スワヒリ語で調査・研究）などというものにうつつを抜かしているようにみえる私などは，とうの昔に呪われているでしょう。

そういった世界を，ここでは，まず一通の手紙の紹介から，説き起こすことにしましょう。

Ⅱ　一通の無心状から

私は，1999年の10月にウガンダの首都カンパラの宿舎で一通の手紙を受け取りました。封筒には入っておらず，中質紙のタイプ用紙にアフリカで一般的なビックのボールペンで書かれ，それを内側に折り曲げてステイプラーでとめたもので，日付は1999年の３月25日でした。差出人はジョセフ・オマディア。現地NGOのタイピストで1997年に私が村で住み込み調査を始めたときからの旧知の人物です。

「親愛なる梅屋ヤコボ（私の現地名），私の雇用主であるマリーが，1999年４月の第一週，マケレレ大学で一ヶ月の司書研修コースを受けるための準備をするようメッセージをくれました。大変喜ばしいことです。家庭のいろんなことがあって首都カンパラに出発するまでに昨日までの概算で35,000シリング（当時約3,500円）[6] 必要で，合計60,000シリング（約6,000円）必要なのです。この60,000シリングは，コースが終わった初めの月にお返しします。というのもそのころには私の給料が何パーセントか上がるからです。よろしく」（以上１枚目）

「1999年の第三週，私の家族はジュオギ（*juogi*＝死霊）の攻撃を受けました。１週間後によくなったが，それはこの地域の何人かのジャシエシに，調べてもらったからである。５月18日，さらには20日にも私はジャシエシを訪れ，オティンガ（ジャシエシの人名）のところでこの事件について調べてもらった。オティンガの霊の調べでは（ここで言及されているジャシエシはそれぞれに憑いている霊が単数あるいは複数おり，それあるいはそれらとの対話で何らかの診断を得る），1945年にひどい飢餓（「マウェレの飢饉*kech mawele*」という当地を襲った大飢饉を指す）のため樹の下で死んだ父の祖母は，葬式は行われたが最後の儀礼（ルンベ*lumbe*）が行われていない[7]。ウェレの祭祀装置（屋敷内にある直径30センチほどの小屋）によっても同じ調べだった。関係親族はすでに私を残して全て亡くなっているので，私が死者を送る最後の儀礼をやらなければならない。私は雌山羊（18,000シリング），雄鶏（5,000シリング），労賃（12,000シリング）計35,000シリングが必要なのです。」（以上２枚目）

興味深いのはこの一枚目と二枚目の深い断絶です。一枚目は要領よく家庭の問題があり経済的に困っているから個人的援助を頼みたい旨がまとまっています。

二枚目の手紙は，おそらく1997年からの私の調査を知らなければ書かれなかっただろうと思います。私が調査に入る前に開発プロジェクトでの調査を（被調査者として）経験し，開発調査なれし

ていた彼らは「呪術」を研究する私にも「実効性」のあるプロジェクトを期待していたようです。そうした期待もやがて薄れたことでしょう。私が興味を示すのはむしろ逆向きの，彼らからみても「遅れた」と表象されることが多いジャシエシがかかわる信仰だったからです。私がジャシエシを訪ねたいというと最初は通常笑いが起こったものでした。薄笑いを浮かべながら案内してくれたのも，その場では真剣な面持ちで託宣を聞いていたのも彼，オマディアなのです。

この二枚の断絶に，伝統的な世界観と，近代的世界システムの産物（大学，司書，雇用など）との接合ないし共存状態が（あるいはうまく接合されていないとしても）よく現れていると思います[8]。

Ⅲ　災因の種類[9]

1．ジュオク*juok*，ジュオギ*juogi*，ティポ*tipo*

一般に，アフリカ人は伝統的には自然死を信じない，と言われます。死には当然理由があるし，不幸にもそれを引き起こす理由がある，というのです。

ある老人は私に，自分と同世代の人間は，ほとんど死んだ。いろいろな理由で死んでいった。エイズ，マラリア，事故，毒，悪霊，殺人，首つり，老衰，結核，発狂，呪詛などだ，と語りました。続けて，その背後にある主な原因として死霊，怨霊，毒をあげました。ここではその流れに沿って紹介しましょう。災いを引き起こす霊には，大きく分けて三つのパターンがあるそうです。第一に，屋敷の外部から危害を加える意図をもって呪う霊，第二に，最後の葬送儀礼を執行することを要求する死霊，そして家族の構成員に殺されたものの死霊です。

第一のものは，悪意あるものがジャシエシに依頼して行う意図的なものです。ジャシエシは，霊に自らも憑依されて守護霊か使い魔のようなものをもっていますし，その霊を通じて霊界（日本語で言うほど生きている人間と隔たった所だというイメージはありませんが）と交流できるので，悪霊を送りつけることも，それを解呪することもできる，と考えられています。いわば，正悪いずれにも能力を発揮するわけです。ちなみに匿名性の高い，誰のものかわからない，人間のものかすら通常定かでない霊を集合的にジュオクと呼びます。それに対し，誰か生者とのつながりも名前もわかる，最近死んだ人の霊を単数で呼ぶ場合にはジュオギと呼ばれることが多いようです。

第二のものは，先に紹介した手紙がそうであるように，ルンベという――無理に日本風にいえば弔い上げのような――最終葬送儀礼を執行されていない祖先の霊が，それを要求するメッセージとして病や不幸を送りつける，というパターン。これが数としては一番多いようです。最も説得力があり，生きている人同士の葛藤も生みませんのでジャシエシは好んでここに落とし所をもっていこうとします。

第三のものは，これはティポ（*tipo*＝影）という別名をもっていますが，殺されたものの霊が加害者の屋敷にとりついて不幸や死の原因となっている，というものです。これは前提として殺人という事件がありますから，最近はよほどのことがない限り持ち出されることはありません。

これらの霊の事例をみると，死者は生きている者と同じく，ねたみや要求をする存在であることがよくわかります。

2．アイラ*ayira*（毒）

さて，これ以外の不幸や死の原因として，毒があります。これは，酸や農薬や殺虫剤などのように自然科学的に見ておそらくトキシック（有毒）であるものと，ジャッカルの骨の灰だとか，蛇の肉だとか，そのあたりが怪しいものとがありますが，彼らはそれを区別しておりません。主に消化器系統に疾患を招くことが多いようで，とりわけ最強の毒と呼ばれるキダダ*kidadda*は，ムブルク（ハゲワシかコンドルの仲間と思われる）という鳥の肉を加工して作るようですが，防衛策はないといわれています。腹部が膨れ上がって死に至る，

という恐ろしい毒です。

このお話を仙台の「アフリカ・セミナーの会」（当時の会長は山形孝夫宮城学院女子大学名誉教授）という市民の会で紹介したとき，ガーナにJICA専門家として派遣されておられた医学者が，ガーナにも似たような毒の事例があると語っておられました。

３．ラム（*lam*＝呪詛）

ここでは「呪詛」と訳しましたが英語で言うcurseいわゆる正当呪術のことです。これは，典型的な例として，「ファラオの呪い」が挙げられます。「わが墓を暴くものは死すべし」という呪詛のせいで墓を暴いた人びとがばたばたなくなった，というケースが最もこれに近いと思われます。

現地では一般に年長者に暴言を吐いたり，頼みごとをむげに断ったりした場合に怒った年長者が「お前の人生をだめにしてやる」とか，夜中に先祖の墓や蟻塚に出向いて服を脱ぎ，死体を擬して仰向けになって「お前の子孫はあんなことをした（あるいは言った）」と発言したり，当該の年少者に裸体，ときには性器を見せたり（これはタブーです）することで行われます。

これは，当事者間のことですから，年長者の望む贈り物をして機嫌を直してもらい，ビール[10]（といってもふつうのビールではありませんが）と鶏を共に食べ，水を年長者の手から手渡す，という儀礼をおこなうことで解決しますが，そのやり方をジャシエシが指示することもあります。

４．ウェレ*were*

このほかにも，テリトリーをもつウェレという神格が伝統的なパンテオンを構成していたようですが，ここに1930年代に来たキッチング神父がこの神格への信仰を「子供の宗教」として排撃したため，いまではジャシエシの屋敷でしか見ることができません。これは，大きく分けて屋敷のウェレ，門のウェレ，ブッシュのウェレという三つがあります。30センチほどの小さな小屋をいわゆる「よりまし」にして，折に触れてそこに卵を供え鶏を供犠していたようです。

Ⅳ　ジャシエシの儀礼

ジャシエシの儀礼のなかで，もっとも大きな比重を占めるのが占いです。これにはさまざまな種類があります。例えば，タカラガイを地面に敷いた毛皮の上に放り投げて占うもの，カメルーンなどでは地面のなかに住む蜘蛛の巣に壺をかぶせてそれをたたき，逃げ惑う蜘蛛の足跡を見て占うもの，隣のコンゴなどで有名なのは，２種類の木の枝を蟻塚に突き刺し，どちらを食べるか，その結果で占うものがあります。ひよこに毒を飲ませ，生きながらえるかどうかで占うものもあります[11]。

ジャシエシの多くは，異民族のサミア人です。異民族でなくとも，その技術を外部から学んだ，ということで権威づけています。彼らの儀礼小屋は，大量の薬瓶とともに内陸国では珍しい海の貝殻や，センザンコウの鱗，豹かジャコウネコの毛皮，レイヨウの角などがおかれています。なかには過去に私がごみと一緒に穴に捨てたはずの切れたベルトや，どこで入手したのかカップラーメンのどんぶり（日本製）などが後生大事に置かれていることもあります。白人のものだから珍しいし，力があるというわけです。昔は，白人は死なない，と考えていた人もいたようです。事実，白人の葬式に出席した村人はいなかったので経験的には無理もないのですが[12]。

さて，ここでは，私の見た儀礼を紹介しましょう。私はさしたる相談事もないままにジャシエシを訪れました。

瓢箪のがらがらを鳴らして占います。若い男，女性，それから長老など，３つの声を使い分け，３つの霊が出てきました。足音もそれぞれ違って凝っています。霊がしゃべっている間，ジャシエシの唇は動いていません。腹話術だと思いますが，よくわかりませんでした。

「お前は，あちこちにある聖なるものを知らず知らずのうちに暴いている。あちこちの岩山，蟻

塚，泉などには，それぞれ精霊がまつられているのだ」と言いました。続けて「ここから先，お前を危険が待ち受けているから，守護霊をつけてあげようか」ありがたい申し出です。「それなら20,000ウガンダシリング出しなさい。交通費だ」仕方なく札を出すと，ジャシエシはその札の上にカップ麺のどんぶりでうやうやしく蓋をしました。

信じているわけではないですが，その後ランドクルーザーがひっくり返り，警察が「死者は何人だ」と尋ねるほどの事故に巻き込まれましたが，私はなんとか無事でした。

V　現代的な出来事を歌い込んだ呪い歌

さて，このような霊や呪詛で表現されるのは伝統的な事件に限りません。ただ，最近の事件や人物については，当事者や遺族のたてまえもあり，おおっぴらに語るわけにもいきません。しかし，夕刻ビールを楽しみながら即興的に歌われる歌の歌詞には，しばしばこういった呪いを含んだアイロニーが表現される場面を垣間見ることができます。なかでも人気が高いのは，地元出身の大臣で当時の大統領イディ・アミン[13] に謀殺されたオボス＝オフンビという人物を歌ったものです[14]。

オボス＝オフンビという人物は，アドラ民族から出た歴史上二名の国務大臣のうちのひとりで，オボテ政権では内閣や国防省の要職を占め，それに続くアミン政権（1971-1979）では国防・財務・内務大臣を歴任した人物です。敬虔なプロテスタント信者で，当然地元では一番の出世頭だったのですが，度を超えたまじめさが災いして，どうも融通が利かない。この地域で富者に期待される周囲への施しはせず，財の再分配の要求にもなかなか応えません。それが吝嗇にうつったようで地元ではあまり愛されていません。もうひとりオボテ政権時代に国務大臣になった人物，オチョラ[15] がいて，この人物は地方行政大臣としてたくさん病院や診療所をつくったので大変な人気です。

オフンビの場合には病院ではなくて，誰もが嫌いな兵舎を，アミン政権の国防大臣として誘致し，サバンナのど真ん中に近代的な大邸宅を建てたものですから，評判が良くなるはずもありません。その建築資材も兵舎を建てるはずのものをふりむけたのだ，などという噂が出る始末です。2,000エーカーもある，航空機も着陸できるほどの地所は，近隣の人を追い出して接収したものだ，と噂されています。住民は実際かなり苦労したようです。とにかく噂のなかで語られる彼は，自分の利，家族の利が優先どころか，それ以外になくて，人に何かをする，という発想がまったくない人物だったそうです。（私は息子さんと10年来の知己で，現在ではフェースブック仲間ですが，息子さんはさばけた，親切な人です。）

彼は結局長い間アミンのナンバー・ツーとして，右腕として仕えたのですが，1977年にプロテスタントの大主教とムスリムであるアミンとの問題がこじれた間に入って殺されてしまいます。

彼の死を住民はとても喜びました。そしてそれまで密かにつくってこっそり歌っていた歌を踊りながら歌ったといわれています。

その生前からすでに歌のなかで彼の悲劇は予言されていました。以下に歌詞を示すのは，お金に飽かせてほしいままに飲み食いをし，「満足するまで食べ」「酔っ払うまで飲んだ」オボス＝オフンビの「体」を「腐る」トマトにたとえ，「腐って土にかえる」と予言する，呪い歌です。当時官僚だったにせよ，政治家だったにせよ贅沢三昧の資金の出所が国庫であることにかわりはありません。しかも生前の吝嗇をほのめかされる彼が，死後周囲の誰からも追悼されないことも示唆しています。

…その体はトマト／その体は腐ってその体が土にかえるのもあっという間／その体はトマト／その体は腐ってその体が土にかえるのもあっという間／満足するまで食べたなら　腐るのも早くなる／酔っ払うまで飲んだなら　飲んだなら　腐るのも早くなる／もしあなたが鶏をしめていくらか隣人に分け与えた

ならば　そのひとがあなたを悼みもしようが…

この歌は，彼の生前1970年ごろからこの地域で大流行し，現在でも50歳代以上の年配の人間は誰でも知っていますし，若い人にも歌い継がれています。

1977年の彼の死後にはすぐに以下のような歌が流行します。

…おいおい雄牛が立ち去ったぞ／オボス＝オフンビのことだ，エー／お前は意味もなくうぬぼれている。もうニウェー（聞き取りにくいほどの小さな音の擬態語）という音を立てることさえないのに…

その運命には言及していませんが，生前の業績をアミンともう一人の地元出身大臣であるオチョラとの対比で描いた歌もあります。二人の人物の地域での評価が対照的です。

…アミン・ダダ，オボス＝オフンビ，ヘイ，ヘイ／何も起こりはしなかった，まったく／オボス＝オフンビ，アミン・ダダ，ヘイ，ヘイ／何も起こりはしなかった，まったく／ただこの地域がだめになっただけ／彼は兵舎を持ってきた／お前は盗賊を連れてきた／お父さん，それだけさ／他に何も起こってはいない／アミン・ダダとオボス＝オフンビ，ただこの地域がだめになっただけ／オチョラ・オンドア，ヘイヘイ／私たちのために建ててくれた／私たちはいつもあなたのことを考える／あなたをいとおしむ／お父さん／オチョラ・オンドア／あなたのことを考える／お父さん／ヘイ，ヘイ／オチョラ・オンドア／お父さん／あなたを思う／オボス＝オフンビ，アミン・ダダ，ヘイ，ヘイ／お父さん／何も起こりはしなかった，まったく／結構なことだよ／お前は土地を奪った／父よ／とても上手にね／オボス＝オフンビ，アミン･ダダ，ヘイ，ヘイ／お父さん／何も起こりはしなかった，まったく／結構なことだ／お前は土地と父親のことで努力した／誰もお前ほど努力しやしない／そうしたのはお前／ヘイ／お父さん／オボス＝オフンビ，ヘイ／お前はパドラの本を書いた／ヘイ／お父さん／それはよいことだ／オボス＝オフンビ，ヘイ／本を書いてくれてありがとう／兄弟よ／ヘイ／お父さん／何も起こりはしない，何も起こりはしない／オチョラ・オンドア／ヘイ／お父さん／病院を立ててくれた／あなたを私たちはいつも思い出す／オチョラ・オンドア／ヘイ／ありがとう／お父さん／この地域を発展させてくれた／ムランダに診療所を建てた／誇りに思います／ヘイ／お父さん／キソコにも診療所を建てた／オチョラ／あなたが建てた／お父さん／感謝します／ナゴンゲラの診療所をありがとう／ヘイ／わが兄弟オチョラそしてジョパドラすべて／オチョラは生まれ変わるだろう／トロロの街はすべてあなたがつくった…／オボス＝オフンビ／ヘイ／アミン・ダダ／何も動きはしなかった／お父さん／バラックが来てわれわれは搾取された／何も起こりはしなかった…

ここでは，「アミン･ダダ」と「オボス=オフンビ」によってこの地域がだめになったこと，その具体的内容として盗賊と言い換えられている「兵舎」（ルボンギ兵舎）の誘致が歌われています。一方「オチョラ・オンドア」によって診療所がムランダ，キソコ，ナゴンゲラに設けられ地域が発展したことが讃えられ，それによって地域の人びとが彼を慕い続けていることがうかがえます。「オボス=オフンビ」については，パドラについての本を書いたこと[16]，土地を「上手に」奪ったこと，「父親のことで努力した」ことが指摘され，結果として自分の家族には手厚いし，知性はあるが周囲から土地を搾取するなどの点が批判的に描かれています。「父親のことで努力した」というのは，オボス＝オフンビは父親の墓を少なくとも二度大きなものに建て替えており，最後には父親を顕彰するチャペルまで建てたことを指します。土地云々について真偽のほどはわかりませんが（内戦が続いたため文書が散逸していることもあって調査がそこまでは及びません），その他のことはすべて事実にもとづいています。

土地のことに関してはその状況を描いた次のような歌を採取しています。

…オボス＝オフンビ，おまえはすべての金が自分のものだとうぬぼれている／でもおまえが最初に土になった／おまえは土になり，すべてあとに残された／オボス＝オフンビ，おまえはあらゆる富は自分のものだといった／でも最初に土に帰ってしまった／おまえは最初に墓に入ってあとにすべて残された／オボス＝オフンビ，おまえは，その土地は自分のものだといった！／おまえは逝ってしまい，すべてがあとに残された／オボス＝オフンビ，おまえは人々の土地を奪うために努力した／多くは無駄におわり，土地はそのまま残された／白い豆はキャッサバにかけるとうまい×６／白い豆はキャッサバにかけるとうまい×６／オボス=オフンビよ，おまえも白い豆を味わうといい／キャッサバにかけた白い豆はとてもうまいから…〔註：キャッサバと白い豆は，土になってしまったオボス＝オフンビを喩えたもの〕

地域のひとびとの怒りと恨みはそうとう深いものだったようです。彼の死後も歌を通じてその遺族に対してその怒りの矛先を向けます。

…ウウウウィ！ウウウウィ！ウウウウィ！ウィ！ウィ！ウィ！／オボスの妻はルグバラのせいで泣き叫んだ／悲しみのあまり彼女は泣いた／ルグバラが夫を殺してしまったから／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラが私の夫を殺してしまった！／オボスの妻は泣く「夫は蛇と一緒にいるのよ」／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラが私の夫を殺してしまった！／オボス=オフンビの妻は亡骸のそばで泣いた！／オボスの妻は泣いた／ルグバラが怒って私の夫を殺してしまった！／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラが怒って私の夫を殺した！／オボスの妻はルグバラのせいで泣き叫んだ／悲しみのあまり彼女は泣いた／ルグバラが夫を殺してしまったから／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラが怒って私の夫を殺してしまった！／オボスの妻は夫を悼んでニョレ語で泣いた「彼は私の夫を殺してしまったのです」／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラがとうとう私の夫を殺してしまった！／弔問客のだれもが，私がこれからどうしたらいいかと聞くだろう！／ウォー！ウィー！大切な妹よ！／「ねたみぶかい人たちはいつも他人が栄えるのを見ると足を引っ張るものだ」／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！／ルグバラが私の夫を殺してしまった！／私はこれからどうしたらいいの，兄弟たちよ，姉妹たちよ，彼女は叫んだ／ほんとうにこれからどうしたらいいの？／だれか助けてと太鼓が打ち鳴らされる〔が，誰も助けには来ない〕／蛇が夫を殺した！／ルグバラ！ルグバラ！／彼女は泣く，ウォー！ウィー！ウォー！ウィー！ウウウウィ！ウウウウィ！ウィ！ウィ！ウィ！／ルグバラがとうとう私の夫を殺してしまった！／エーエ！エーエ！エーエ！エーア！ルグバラが私の夫を殺してしまった！…

以下の歌ではオボス＝オフンビが殺害されたときに妻が妊娠していたという生々しい事実まで描いています。周囲から孤立する遺族の困難を歌いながらも，キリスト教系（プロテスタント）エリートへの反感と土地を奪われた住民の怒りが伝わってきます。夫を失った妻に追い打ちをかけるような，ある意味では非常に残酷な歌です。

…息子が死んで貧困がおまえをとらえるだろう／いちばん下の子はまだお腹の中だというのに／どうしよう？！／母よ，息子よ，さあどうしよう？！／兄弟よ，どうしたらいい？！／オボスは泣きくれた！母よ，一体どうしよう？！／隣人よ，どうしたらいいというのだ？！井戸に水を汲みに行く道行き，陰口を叩く人たちよ／末の子よ，どうしよう？！／兄弟よ，どうしたらいい？！／本当に出口がない！／兄弟よ！／死がかの傍若無人なジェントルマンを連れ去った！アーア！アーア！アー！／オジェムは泣く，レロと！／「母よ，私は死にそうだ！」／Hullo! sister! sister! brother! brother! ／ this man is

killing me!／killing me for nothing!／am only one person in my father's home ／ now I am going to die for nothing ／Ojem is crying!〔教育を受けたエリートに対する皮肉の意味でわざと下手な英語の歌詞が入っている〕／アマーマ！母よ！〔利益を受けた親戚が嬉し泣き〕／あちこちで息子の陰口を叩く奴らがいる／老人が地酒を飲むときの水を汲みに行くときでさえ，彼を話題に／ああ！息子よ！あーあ，母よ！〔泣きながら〕息子よ！／オボス＝オフンビは，本当に死んだ！／オボス＝オフンビは，本当に泣いた！／さあ，いま，私達は嬉しくて踊る／死がかの傍若無人なジェントルマンを連れ去った！／私達はもう，遠慮なく踊りを楽しむことができる／奴らは土地のために死ななければならなかったのだ／学のある兄弟たちよ！／土地を奪うために知恵をめぐらせるなんて，悪いやつだ／いっておくが，人の土地を奪うために計略をめぐらせるなんて本当に悪いことだ！／学のある人たちよ！／教えてやろう，友人から土地を奪うなんて，とんでもない犯罪だ，神だって決して許しはしないだろう〔オボス＝オフンビがキリスト教の熱心な信者であることに対する皮肉〕／見ろ，結局土地がもとで，オボスは泣きをみた！／兄弟よ，どうすればいい？！／誰のために富を残せばいいというのだ？！／誰に子供たちを託せばいいというのだ？！／誰に土地を残せばいいというのだ？！／アドラ民族の同胞，金持ちの友人よ，おまえは，悪いやつだ／死がかの鼻持ちならない傍若無人なジェントルマンを葬り去った！／母よ！母よ！息子よ！／オボス＝オフンビは，本当に泣いた！／いまこそ私達は，楽しく踊ることができる／死がかの鼻持ちならない傍若無人な息子を葬り去った！／本当の本当に，オボス=オフンビは泣いた！／子供たちを誰に託せばいいのだ？！／財産を誰に残せばいいというのだ？！／妻を誰に託せばいいのだ？！／自動車は誰に残せばいいのだ？！／屋敷を誰に残せばいいのだ？！／金を誰に残せばいいのだ？！／しかし，土地を奪ってはいけない／オボス=オフンビ，おまえは金を持っていると威張っていたね／でも，エノ，エノ！それを全部残していったんじゃないか！／オボス＝オフンビ，　おまえは大地主だといって威張っていたよね！／だけど，エノ，エノ，死んだあとまで持って行けやしないだろう？！…

どの歌にも，アミン時代の国防大臣だったオボス＝オフンビは鼻もちならないセルフィッシュな男で，周りの人々の土地をうまくだまし取った悪人，というイメージが具体例とともに歌いこまれています。ここにも冒頭述べたような世界観が展開しています。他人を公然と批判すると呪詛を招くと信じられているこの地域では，この歌自体がひとつの呪いです。酔って歌って踊っているから咎め立てされないものの，本来は酔うことも，フンボ*fumbo*というロングドラムを叩くことも，歌うことも，踊ることも，霊の世界，呪詛の世界に通じるものです。

これ以外にもオボス＝オフンビの死因については祖先が殺害した人間の祟り（いわゆるティポ）だ，などといった噂が後を絶ちません。暴君アミンに殺されたことはだれしも知っているのですから，私たちなら呪いや祟りをもちださないところですが，彼らの解釈は，そういった力が発動した結果であることは自明である，というところから始まるようです。また，もうひとつ不思議なのは，オボス＝オフンビのティポがアミンに取り憑いてアミンに祟る，という物語にはならないところです。おそらく住民にとって幼いころから知っているオボス＝オフンビとは違い，アミンはちょっと遠すぎる人物なのでしょう。呪いや祟りは大概身近な範囲で起こるものです。

Ⅵ　おわりに

以上，私のフィールドワークにもとづいて死霊，悪霊などの観念とそれを取り扱う施術師たちの営みや人々に歌い継がれる呪い歌の歌詞を紹介しながら，彼らの信仰体系を考えてきました。しかし，このような心性はアフリカに限りません。日本にも沖縄のユタや東北のイタコやカミサマのような呪いや祟りを扱う宗教者がいます。「困ったとき

の神頼み」という言葉もあります。不治の病にかかったときに位牌や先祖のお墓のありかを問題にする人はまだ日本にも多いはずです。これは祖霊の問題に他なりません。

東北学院大学教養学部在職中はほぼ毎年，ゼミの合宿で，恐山の大祭，イタコの口寄せを見に行っていました。近年自死遺族が口寄せに通う点に注目した研究がおこなわれていると聞いています。私が出会った相談者たちも，いろいろな問題の出口を求めてやってきていました。ひとつだけ例を挙げますと，夫の父親を看取った奥さんを中心にそのご家族が相談にいらしていました。ひとりの人間を見送るまでの介護は過酷ですから，トラブルはいくつもあったに違いありません。そのケースでは，ほかの家族は介護の現場にいなかったようですし，妻は家の中では唯一の他人です。ことによると，昨今ではDVなどの疑いをかけられる可能性もある弱い立場です。亡くなった父親の霊がイタコの口を借りて，満足だったといってくれることで，心理的にも満足したし，いろいろもって行き場のなかったものの解決がついたと語っていました。社会的にも奥さんは面目を大いに施したのでした。「この世」の悩みを「あの世」に投げ捨てる仕組みとして機能していると感心したものです。

健康で，何不自由なく暮らしていれば不要な観念に見えるかも知れませんが，（病気や身近な人の死に限りません。地元出身の大臣の暴政でも）ひとたび「災い」に直面したときにはとたんにそういった「超自然的」な観念の出番が来るのです。人は，自分が生まれてきた理由さえ知りません。「いかにして」How不幸になったかはわかります。しかし，「なぜ」Whyどうして自分にこんな不幸が降りかかってくるのだろう，という解答のでない難問に答えるには（答えないで放置できるほど人間は図太くはできていないようです），まだまだ呪いや祟りの居場所はあちこちにあると考えるべきでしょう。

【註】

1）本稿は，平成22年10月23日に神戸大学鶴甲第一キャンパスF301 で行われた第11回神戸大学大学院国際文化学研究科公開講座（ひょうご講座2010）「文化としての宗教―アフリカの死霊・怨霊・呪詛・祟りの観念と霊媒」の発表原稿に大幅に加筆修正したものである。

2）東北学院大学大学院人間情報学研究科非常勤講師。

3）この概念の詳細については，梅屋［2009a］参照。

4）その言語ドパドラDhopadholaを正確に用いるとすれば，クラッツォララ神父［Crazzolara 1951］のように “Jo-P’Adhola”と表記するのが適当かも知れないが，ここでは新聞などの現地の慣用に従った。*jo*は「人々」をあらわす接頭辞（複数。単数は *ja*），その後の *P’* も「場所」をあらわす接頭辞 *par*がその後の母音と一体化して*r*が省略されたものである。Adholaは彼らの伝説的な始祖の固有名で全体としては「アドラの場所に住む人々」の意。*Ethnologue*第16版［Lewis 2009］の推計によれば2002年現在36万人。

5）ジャシエシについては，梅屋［2008, 2009b, 2012］参照。

6）参考までに現在のレートを記しておくと，2011年12月から2012年５月までの平均で，１円＝30.7378UGX（ウガンダシリング）で取引された。

7）ルンベ儀礼については梅屋［2008, 2009b, 2012］。

8）このエピソードについては梅屋［2011a］参照。

9）この節の資料については梅屋［2008, 2009b］にもとづいている。

10）ここでは，コンゴ*kongo*という，シコクビエを醸造してつくる地酒。壺に入れて湯を注ぎ，植物の髄を抜いてつくった長いストローで飲む。

11）蟻塚託宣と毒託宣（ベンゲ*benge*）は，エヴァンズ＝プリチャード［2001］の研究によって広く知られるザンデの託宣。同書の簡便な紹介は梅屋［2004］。

12）この地域では，万難を排して埋葬前に遺体と対面し，死を確認することがなにより重要視される。

13）幼名をイディ・アウォ＝オンゴ・アンゴー Idi Awo-Ongo Angoo。生年については諸説あり，1924, 1925年あるいは1928年という記述もある。西ナイル

県とスーダンの国境近辺のコボコ出身といわれる。カクワ人の父とルグバラ人の母に育てられた。民族をまたがりイスラム教を紐帯とするコミュニティ，通称ヌビとして育った。1946年よりKARに在籍し，ビルマ戦線に参加，1949年の世界大戦終線まで前戦にいた。マウマウ運動鎮圧にも参加（1952-1956）。中尉となり，保護領時代ウガンダ人としてただ２人大英帝国より将校の職権を与えられていた。大統領としての任期はシンガポールにおける英連邦会議出席中のオボテ大統領から政権奪取した1971年からタンザニアの協力を得た反乱軍によって敗走する1979年まで。その後サウディ・アラビアに亡命。亡命時の約束を遵守し長らく沈黙を守った。2003年７月下旬危篤。当時その体重は220キロを上回っているといわれ，透析しながら意識不明と回復を繰り返し，二回の腎臓移植を敢行するが功を奏さず，2003年８月16日午前７時（東アフリカ標準時間）死亡。

14）アルファクサド・チャールズ・コレ・オボス=オフンビ（Arphaxad Charles Kole Oboth-Ofumbi, 1932-1977）は，1932年トロロ県生まれ。キソコ初等学校（1942-1947），ムバララ高校（1948-1950），プロテスタントの名門校キングズ・カレッジ・ブド（1951-1953）卒業。ブケディ協同組合にアシスタント（1954-1958）。ブケディ県弁務官室（1958-1960），アチョリ・ランゴ県の副県弁務官（1960-1962）。アチョリ県弁務官（1963）。1962年10月９日のウガンダ独立後，総理大臣室秘書官補佐，同上級秘書官補佐（1963）。他方行政省地方監査官兼任，内閣官房副長官，総理大臣室上級秘書官補佐長（1964）。国防省事務次官（1971）。続くクーデター後のアミン政権成立で国防担当大臣（1971），国防大臣（1971-1973），財務大臣（1974-1976），内務大臣（1974-1977）などを務め，大統領外遊時の大統領代行。1977年２月17日歿。当時の政府公式発表によると，軍に連行される途中に起きた自動車事故による死亡だが，一般にはアミン大統領による粛正とされている。より詳しくは梅屋［2011b］参照。

15）ジェームズ・サイラス・マリロ・オンドア・オチョラ（James Silas Malilo Ondoa Ochola, 1924- c1972）1924年ブダマ生まれ。聖ピーターズ・コレッジを経て聖メリーズ・コレッジ，キスビ（1944-1945）卒。ウガンダ東部州の会計官（1946-1947），労働監査官（1948-1953），南ブケディ協同組合会長（1954-1959）。この間1955年から56年にはローボロー・コレッジ留学。ブケディ県議会議員（1949-1951），立法審議会議員（1961）。1962年の独立時には，民主党（Democratic Party: DP）より南東ブケディ選挙区から国会議員，自然資源省政務次官。党副院内幹事として天然資源省政務次官（1963），1965年ミルトン・オボテ（Apolo Milton Obote 1924-2005）率いるウガンダ人民会議（Uganda People's Congress: UPC）へ移籍後，オボテ大統領下の情報・放送・観光副大臣，公共事業大臣（1966）。1967年の内閣改造で地方行政大臣となってブギリ，アパッチなど国立病院，パドラにはムランダ，キソコ，ナゴンゲラ三箇所に診療所を設置。その後1971年のアミン大統領のクーデターによって公職を離れる。1972年９月より行方不明。1973年アミン大統領が公表した85名の失踪者リストには「行方不明。国内にはおらず，行く先を知るものは誰もいない」。家族はこの政府の発表でオチョラの死を確信したという。

16）Crazzolara［1951］の９頁の記述を除けば，アドラ民族の最初の民族誌は彼によって現地語で書かれ，出版されたOboth-Ofumbi［1960］である。

【参照文献】

Crazzolara, J. P., 1951, *The Lwoo,Part II: Lwoo Tradition*, Verona.

Lewis, M. Paul, (ed.), 2009, *Ethnologue: Languages of the World, Sixteenth Edition*, Dallas, Tex.: SIL International.（http://www.ethnologue.com/ 2012年５月31日参照）

エヴァンズ＝プリチャード，E. E. 2001,『アザンデ人の世界―妖術・託宣・呪術』（向井元子訳）みすず書房。

Oboth-Ofumbi, A.C.K., 1960, *Padhola: History and Customs of the Jopadhola*. Nairobi, Kampala & Dar es Salaam: Eagle Press, East African Literature Bureau.

梅屋 潔，2001,「エヴァンズ＝プリチャード，エドワード，E.（1902-73）『アザンデ人の世界―妖術・託宣・呪術』向井元子訳，みすず書房，2001年」『文化人類学文献事典』（編集委員：小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三）弘文堂。

――――，2008,「ウガンダ・パドラにおける『災因論』―*jwogi*，*tipo*，*ayira*，*lam* の観念を中心として―」『人間情報学研究』第13巻，131-59頁，東北学院大学人間情報学研究所。

――――，2009a,「民俗宗教」『祭・芸能・行事大辞典（下）』（小島美子・鈴木正崇・三隅治雄・宮家準・宮田登・和崎春日監修）朝倉書店，1721-1722頁。

――――，2009b,「ウガンダ・パドラにおける『災因論』―現地語（Dhopadhola）資料対訳編―」『人間情報学研究』第14巻，31-42頁，東北学院大学人間情報学研究所。

――――，2011a,「グローバル化と他者―今日のフィールドワークとは？」『文化人類学のレッスン［増補版］』（奥野克己・花渕馨也編著）学陽書房，233-256頁。

――――，2011b,「ある遺品整理の顛末―ウガンダ東部トロロ県A・C・K・オボス＝オフンビの場合―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集，209-240頁。

――――，2012,「死者を葬る―農村の災いと死，そして施術師について―」『ウガンダを知るための５３章』（吉田昌夫・白石壮一郎編著）明石書店，176-180頁。